
勇者なんてお断りだ！

優太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者なんてお断りだ！

【Nコード】

N2020X

【作者名】

優太

【あらすじ】

俺こと黒瀬軍司は、幼馴染みにして親友の柊春樹と、そいつの彼女である九重晴と共に、平和な日常を送っていた。そう、あんな事件があるまでは――

プロローグ（前書き）

この作品は、物語が進むにつれて残酷な描写、性的な描写が増えていきます（主に流血表現）。

なお、登場人物の皆が間一髪で助かるという保証ありません。

そういった描写、物語の苦手な方は、拙作を読まないことをおすすめします。

プロローグ

夕暮れ時、坂道を上る、三人の人影。少年二人に少女一人。彼らはちやうど遊びに行つた帰りで、この内真ん中に立っている長めの金髪の男子の家の向かう途中だ。

「んで俺は言つたわけよ。「向こう百年、恋人保証付きだ」ってな」

「はいはい、ごつつおさん」

「もお、恥ずかしいからやめてよお」

黒い短髪の男子が呆れ気味に、茶髪のセミロングの女子が恥ずかしそうに顔を俯かせて、それぞれ言葉を返す。よく見れば、金髪の彼と茶髪の彼女は手を繋いで歩いている。

「春樹はるきののろけ話は話の構成がうますぎて、胸焼け起こしそうなんだよ。あー、これについての反論は要らん」

「んー、けどやっぱ、お前も彼女でなければわかるぞ？　ほんとに好きな相手なら、自慢したくてたまんねえから」

「さあな、年齢イコール彼女いない歴の俺には、さっぱりだ」

「それが顔が悪いからじゃなくて、単に女に興味がないからってのが、なんとも悲しいな」

そう言われた黒髪の彼は、確かに容姿は悪くない。背は百八十センチの長身で、無駄のない引き締まった筋肉と、落ち着いた雰囲気を見せるクールな顔立ち。ともすれば、若くして百戦錬磨の風合いすら醸し出す彼は、どちらかと言わずともモテる方だ。

対する春樹と呼ばれた少年は、身長百七十五センチ、体格はひょろりと細く、目は常に好奇心に満ちたような輝きを持ち、笑顔の似合う、というより常に笑顔。ピアスを右耳の耳たぶに一つ、左耳の耳たぶに二つと軟骨に一つ空けており、着崩した麻のシャツが癪に触らないほど着こなしている。いわゆるチャラいと言う部類に入りがやつだが、ムカつかないどころか、そうするのもアホらしいほどのイケメンだ。

「だよねー。こんなイケメン二人のそばにいたら、私見た目フツーだから恨まれるよ」

「なあに言ってるんだよ。晴^{はる}は十二分に可愛いから、嫉妬するのもアホらしいだろうよ。な、軍侍^{ぐんじ}」

「まあ、確かにな。普通に可愛いの種類に入るだろう」

そう言われた彼女――晴は、確かに可愛い。身長は百六十センチほど、体格は少し細め。ぱっちり開いた大きな二重、しかし顔のパーツは小さく、小動物的爱嬌を感じる。胸は大きくもなく小さすぎず、女性的な体格になっている。この、完璧すぎない可愛さが実は女子にも人気があり、彼女と付き合っている春樹は、実は男より女の嫉妬の目が痛かったりする。

「そういえばよ、春樹。件^{くだん}の小説はどうなった？」

「ん？ あー、あれね。いや実はさ、異世界に飛ぶときにどう飛ばすかで迷ったつきり、まったく進まねえんだ」

「それ、進んでないってことじゃん」

「晴う？ そーゆーのは言っちゃダメなんだよ？」

「ま、九重^{ここのえ}が言わなくとも俺が言ったがな」

「四面楚歌！？」

「それは違う」

両サイドからないと手を振られながら、がっくり肩を落とす春樹。そうやって他愛もない話をしながら帰路につく、はずだった。

不意に、眼前に黒い球体が現れる。効果音をつけるなら、もわっと言う感じで。

「おい、春樹」

「ああ、こいつはやべえ」

「え、何、何？ これ何？」

「こいつは、ネタとしていただき！」

「そっちかい！」

ガシッ、とガッツポーズを決めた春樹に、軍侍が目敏く突っ込み

を入れる。

「まあ、やべえ展開なのは確かやね」

「とにかく、逃げるぞ」

といって振り向いた軍侍は、驚愕する。

「道が……ない」

軍侍に遅れて振り返った二人もまた、絶句していた。不意に、何かを背後に感じ取った軍侍が振り向く。

「――みんな、横に飛――」

軍侍の警告を掻き消し、キュオン、と間の抜けた音を最後に、彼らは気を失った。

第一話 勇者なんてお断りだ！

——なんだ、ここは。

……次元と次元の境界線、妾たちは狭間の世界と呼んでおる。

——あいつらはどうなった？

……案ずるでない。あの者たちも今ごろ、妾の仲間と話しておる。ほう、しかし貴殿らは、どうにも強い精霊と巡り会う運命が共通するらしい。

——精霊？

……ああ。まだ名乗っていなかったのう。妾は蓮姫^{れんひめ}。火を司る精霊じゃ。妾の力、貸してやろうぞ、黒瀬^{くろせ}軍侍

——まあ、厄介事さえ引き込まねえなら好きにしゃがれ

……ふむ、なんとも豪傑な。ではまた、後程。存分に親睦を深めようではないか。

クスリ、と少女の笑い声が聞こえ、気配が遠ざかる。それと同時に、軍侍は浮わつた意識をしっかりと掴み取り、目を開けた。寝ていると気づき、腹筋だけで体全体を持ち上げて重心を顔の両サイドについた手に移し、さながらバク転するように起き上がった。

まず目に飛び込んできたのは、ひと、ヒト、人の群れ。ざわついた雰囲気が自分一点に浴びせられ、どうにも居心地が悪い。

「春樹」

「おうよ」

彼——柊春樹^{ひいらぎ}もまた、手をつくところまでは同じで、そこから腕力と勢いで飛び上がって立ち上がる。

「晴、起きな」

周囲の警戒を軍侍に預け、春樹は未だ寝ている晴を起こしにかかる。

「んう……春樹？」

「ほら、起きなよ。こんなところで寝てたら体痛めるぞ」

「うん」

そう言って、かなり無警戒にムクツと上体を起こす晴。目を擦りながら前を見ると、ずっとざわついている群衆に目が止まる。

「あれ誰？」

かなりゆっくりした口調で、群衆を指差す晴に、春樹はさあと首を捻った。

「ようこそお出でくださいまし——」

「「よくもまあいけしゃあしゃあとようこそなんて言えたなあおい」」

「ひうつ」

軍侍と春樹、二人の殺気のこもった速攻の反論に、落ち着いた笑みを浮かべていた、白いローブを着た少女が縮み上がる。

「俺らは来たくて来たわけじゃないし、」

「できることならすぐにでも帰りてえ」

「そこをようこそと言うのはな」

「「例え神が許そうとも、俺ら二人が許さねえ」」

息の合いすぎた、まるでリハでもしたのではないかと言うコンビネーションに、白ローブだけでなく、群衆すらおののく。が、第三者の介入により、二人は、警戒は解かないまでも殺気は抑えることができた。

「まあまあ、皆様。落ち着いてください。急にこちらの世界に召喚してしまったことについては、深くお詫び申し上げます」

言って、これまた白いローブを着た、三十代くらい大人の色気とでも言わんばかりのナイスプロポーションの女性が、深々と頭を下げる。

「しかし、我々にも事情があつての急な召喚でございます。我々の世界は今、魔王に侵略されつつあります。我々は幾度なく立ち向かいましたが、魔王の配下にすら、辛うじて互角に戦えても、追い返すのがやっとです。そんな折、とある文献から、異世界から呼び込

んだものには特別な、聖なる力が宿ると言う記述を発見いたしました」

「つまり、俺たちに勇者をやれと？」

「はい、そのと——」

「だが断る」

軍侍が質問したにも関わらず、軍侍、そして春樹の断固拒否に、流石に大人の白ローブも哑然とした。しかし、ほんの一瞬だけ。こほん、と咳払いをし、気を取り直す。

「では、そちらの女性の方は——」

「私勇者とかって柄じゃないんで。てか、自分達のことぐらい自分達で処理してくださいよ」

「あー、晴？ それは流石に言い過ぎでない？」

「だってそうじゃん。話の流れからして、ここって異世界でしょ？ 異世界の人間がどうなろうと——て言うか、春樹以外どうなっても別にいいし」

立ち上がり、身長的側面で見てもやむを得ないが、上目使いにそんなことをさらっと言っただけの晴を、唐突に春樹が抱き締めた（！？）。

「晴、俺も——」

「はいストップ。そんな状況じゃないね」

軍侍の冷静な突っ込みに、拗ねながらも体を離す春樹。そして晴に背を向けて白ローブたちを見る頃には、先までの冷めた視線があった。

「けどまあ、軍侍。多分こいつら、俺らが魔王倒すか、俺らが死ぬかで用なしになるまで、使い続けるのは確かだぜ？」

「ああ。だからどうするか決めかねてるのさ。ここに居るのは、全員勇者なんて偽善者にはなれない。かといって、断るのも、できそうにない。さて、どうしたものかな」

そこまで言っただけを見ると、ぷくくと笑う春樹がいた。

「どうした？」

「お前、よくこんな状況楽しめるな。軍侍が饒舌になるときは、決まって楽しんでるときだ」

「は？ こんな状況……楽しまずにいれるかよ」

「だな。ま、一つ結論付けるとしたら、」

アイコンタクトをし、頷き合う二人。

「勇者なんてお断りだ！」

第一話 勇者なんてお断りだ！（後書き）

一週間単位で一話づつ公開する予定です。

まあ、三週間くらい空いたら作者が樹海へ修行に逝ったんだろうと思っ
てやってください

第二話 豪腕の黒瀬、柔脚の柊

「うぬら、本当に勇者を断ると言うのか」

「だーかーらー、さっきから言ってるじゃん。勇者なんてもんは俺らには向かねえし、俺や晴に至ってはそこの訓練兵より使えないって」

「それなら、鍛えればよい」

「めんどくせえよ」

「まあそうでなくとも、春樹は魔王なんかと真っ向から殺り合おうって質じゃないだろうな」

「勝てない戦はしない主義、てかあ、平和主義者なんで」

「どの口が言ってるのよ」

バカ、と付け足して春樹の腕をペシッと軽く叩く晴。

ここは、謁見の間。玉座のあるステージには、まず玉座に、中世ヨーロッパの身分の高い貴族の着るような、派手な服装をした王らしき人物。向かって右側に、腰に剣を携えた、甲冑姿の若い男性が立っている。そして広間の側には、左右この広いスペースを埋め尽くさん限りの、人だらけ。貴族がいれば騎士もいる、文人もいて、どうやら魔術師らしき集団も見える。

「まあその話はどうでもいい。が、魔王を倒すには、勇者の肩書きが必要なのか？」

「おい軍侍、お前まさか――」

「春樹、お前は黙ってる」

「必要、とは言わん。ただ、魔王討伐と勇者の存在は、伝承で語られるほど我が国、否世界中の人間の意識に根強くあるのは確か」

「ほう、ならこうしたらどうだ。異世界から呼んだのは勇者ではなく豪傑たる武将で、そいつが協力してくれる、というものだ。これなら俺らは、勇者ではなくなる」

「軍侍！ それじゃあ魔王討伐は受けるってことかよ！」

「いや、お前は好きにしろ。強要もしない」

「……少し、考える」

「そうか。ところで王よ、この提案、呑むか、呑まないか。決めろ」
「勇者ではないにしろ、協力はしてくれるか。それだけでも、十二分に有り難い。のだが……」

「じゃあさ、勇者の影武者作るってのは？」

「「「それいい！」」」

あまりに奇妙な、男性のみの三重奏が晴に向けられる。

「それなら俺や軍侍が勇者にならずにすむし、影武者——影勇者も、一瞬とはいえいい気になれる。変な意味で一石二鳥じゃねえか！
さっすが我が愛しの晴」

言って抱き締めようとした春樹を、晴はするりと躲す。その先で彼がいじけたのは、言うまでもない。

「しかし影武者を立てるにしても、誰がするか、ということだが……」

沈黙が流れる。勇者とは、民の憧れ、国の絶対的戦力、魔王最大のライバルである。そんな役を、例え影武者とはいえ、誰が引き受けるのか。そこに、挙手するものが一人いた。

「偽物なら、やりますよ？」

「晴？」 「九重？」

「だって影武者なら、大して重荷じゃないし。それに演じるだけなら、私得意だから」

「や、晴がそんなことする必要ねえよ。晴がするくらいなら俺が全部背負って——」

「だーめっ。春樹は、黒瀬くんと一緒に行かなきゃ。春樹が喧嘩強い、私知ってるんだから」

「剛腕の黒瀬、柔脚の柊、か」

昔の二人の通り名を、軍侍がポツリと呟く。それは、畏怖と尊敬から付けられた通り名。そして、彼らが表舞台に立つことをやめた、通り名。

「だから、私がやるの。嫌何て言わさないから」

「晴……」

「二人は、これで納得か？」

「異論はない」

「……晴がiiiって言うなら。」

とりあえず、凝^じりは残るもののその場は収まる。すると次は、勇者に授けられる武具の問題——とは言えここは王宮のようだから、心配ないだろう。

その予測を裏付けるように、三人は数人の騎士によりどこかへ案内された。

（案内件護衛にかまかけた監視か……。気に食わんが、まあ俺でもそうしたか）

そこは、武器庫と言う名目の下にある宝物庫だった。どの武器を見ても細かな金銀細工はもちろん、色とりどり、煌びやかな宝石のようなものが嵌め込まれているのがほとんどだ。

「豪華、否豪華と言うべきか」

「俺ら三人にはとても合わねえなあ」

「私もシンプルな方がよかったあ」

「す、すべてこのように飾りすぎているわけではありませんので、お手数ですがお眼鏡に叶うものをお選びください」

監視について来た騎士の中のリーダーらしき人物が勇者（仮）を前に緊張したのか、おずおずと言った感じに促す。

「まあ、見るだけの価値はあるか」

軍侍の言葉に二人は頷き、中に入る。軍侍がまず目をつけたのは、異様な扱いを受けた防具だ。ここにある鎧はどれを取っても一式で揃っている。しかしそれは棚の上に、ただ忽然とそれだけで置いてあった。それは言うなれば、ただの籠手。肘まで届く普遍的構造と、手の甲を軽く覆っただけの、どちらかと言えば服の下に隠してつけるようなものだ。王は彼らに「勇者のために設けた武器庫だ」と言

うから、重厚なものしかないと思ったが、そうでもないようだ。色も黒く、隠匿性の高さから軍侍の趣向にどストライクだ。彼は迷わず、今着ている黒に少しだけプリントがなされた長袖のシャツの袖をまくり、それを装着する。

「うん、悪くない」

そう言って、彼は左に目を向ける。それは武器庫の奥。たまたま顔を向けたただけだ。しかし彼は、衝撃的なまでに彼を魅了する武器を見つけた。

日本刀。それがこの系統の武器に与えられる総称だ。軍侍は近づいて手に取り、鞘からその刀を抜き出した。そこに現れたのは、闇を飲み込まんとするほどの輝きを放つ白刃で、直刃。そして、竜が彫り込まれている。一見派手な装飾品に見えなくもないが、その刃の鋭さ、刀の重量は間違いなく実戦用。それに気づき、軍侍は目を見張る。

「名刀とは、外見と性能とが優れているとは聞くが……これは、儀礼用ともとれる美しさの反面、確実に対象を殺す獰猛さがある。むしろ、怖いくらいだな」

軍侍は言って、鞘に刀を納める。そしてそれを、腰のベルトに刺す。黒いジーンズに日本刀の組み合わせは、一見ミスマッチのようで、意外と合う。あるいは、軍侍の風格があるからこそなせる技か。「よし、これにしよう」

「軍侍、遅かったな」

彼が武器庫を出た頃には、春樹も晴も武具の選択を終えていた。春樹の外見の目立った特徴は、その腰にレイピアが刺さっていることだ。対する晴は、白いローブを羽織、その手には真っ直ぐな銀の棒が握られている。

「それでは皆様、武器の選定も終わられたようですし、本日はお疲れでしょうからお部屋へ案内させていただきます」

いつの間に来ていたのだろう。メイドが四人、彼らを出迎えた。

それを確認した騎士達は、彼女らが信頼できると思っているのだろう、先のリーダーが、黒い服のメイドの中で唯一淡い紫のメイド服を着た彼女に一礼してその場を去る。どうやら並みの騎士を遥かに凌ぐ権力者か、メイドと言う身分に縛られず尊敬される女性らしい。年齢30だろうか、軍侍ならともかくとして、春樹はそこを目敏く感じとる。しかし肌の若さは、現役女子高生で、そうでなくとも幼く見える晴と遜色ない。代わりに冷静さを感じさせる鋭い目とスツと通った鼻筋が、彼女を一気に大人の女性に押し上げる。

「メイド長、サラウィス・レイホードです。以後お見知りおきくださいませ」

言って、優雅に一礼する。彼女が、彼ら三人がこの世界に来て最初に名前を知ったものだ。そして同時に彼らの最大の協力者になることを、彼らはまだ知らない。

第三話別れ、そして、旅立ち（前編）

三人は、一人一部屋を宛がわれた。しかし彼らは今、軍侍の部屋に集まっている。三人の部屋は並んでいたのだが、真ん中が軍侍の部屋だったのと、春樹の頼みで集まったのだ。盗聴されていないことを確かめた軍侍と春樹は、テーブルへ戻る。軍侍が晴の対面へ座り、春樹は晴のとなりに、人一人分の間を空けて座った。普通ならあり得ない行動に、軍侍が少し驚く。彼らは、いつ見ても手を繋ぎ、人目も憚らず密着する。それが、これだけのスペースが空けば、やはり不自然だった。

「さあ……話をしようか」

いつものヘラヘラした笑みを消し、神妙な面持ちで切り出す春樹。「といっても、俺はこれをもはや事後報告と同じ扱いで話すけどな」「なにか、考えがあるの？ それなら私も――」

「晴は！ 晴は、ダメだ。影勇者の件もあるけど、それを差し引いても危ない」

晴の言葉を遮ってまで、春樹は彼女の意見を取り消す。それも、珍しい。彼ら二人はバカがつくほどのカップルだが、依存し合っているだけというわけではない。互いを尊敬し、尊重し、重宝し、そして、依存もしているのだろう。だからこそ、春樹の言動は目に見えておかしかった。しかし軍侍はこれで、ようやく春樹の考えを掴みかけてきた。それは、軍侍も考えたこと。

「お前、この城から逃げ出すのか？」

しかし春樹はブンブンと頭ん左右に振る。

「逃げ出すんじゃない。抜け出すのさ。そして軍侍とは別のルートで、魔王にたどり着く。俺はなんにも全てを投げ出すわけじゃない。あえて言うなら、勇者稼業から完全に離れるだけさ」

「けど、それじゃ春樹、一人で行動するの？」

「ああ。晴には、辛い思いさせるよな。ごめん」

「また、遠くなっちゃうの？」

言って擦り寄ろうとする晴を、春樹は彼女の肩を持って制した。

「今夜にはもう発つ。それを考慮した装備も、手に入れたんだ」

「それを考慮したって、お前。あそこにあるものは全部特殊能力付きだってのか？」

「多分な。装備を自分のものだと決めた瞬間から、明らかに体や考えに違和感があったからな」

春樹は今でこそ感情豊かで人との付き合いを大事にする。しかし昔は、信頼するものとししか関わらず、閉鎖的だった。そんな彼がうまく人の世を渡り歩いたのは、自分自身、そして近辺の変化に敏感なところがあったからだ。そんな彼が言うのだ。信頼はできる。

しかし、今の問題はそこではなかった。

「まあそれはいいとして……九重はどうするつもりだ」

「お前に任せる」

「は？」

「晴を、守ってくれ。多分これは、地球でも、こっちでも変わらねえ」

絶対的信頼の証。自分の愛するものを、自分以外のものに守れと言うことは、想像を絶するほどに難しい。彼もできるなら、自分で守りたい。しかし春樹は自分の役割を把握していた。

自分には、軍侍のように他を圧倒する覇気はないし、実質の勇者も、勤まらない。影勇者は、晴に止められたこともあるが、それ以前に、自分ではいつか化けの皮が剥がれかねない。武を持った軍侍演じ、騙すことに長けた晴。自分にはどちらともない。だが、一つだけ残された道はある。それを人は卑怯と罵り、下劣と蔑む。しかし、彼にはそれができる。否、それしかできない。

それが、暗の道。必要なもの、情報を得るためなら、影で人を痛め付け、殺め、その事すらすぐに忘れられるように暗躍する。夜襲奇襲は朝飯前。それだけが、彼に残された、有用性を示す道。

「軍侍、頼んだ」

「……ああ、頼まれた」

そのやり取りを最後に、この小さな、しかし、三人の道を決める重要な会議は終結し、解散となった。

「ごめんな、晴」

ここは、晴の部屋の前。今にも泣き出しそうな恋人を前に、春樹はなにも言えずにいた。否、言おうとはした。なにせ普段なら、言葉だけで彼女を紅潮させ、しばらくは口も聞けないほど悶絶させるのだから。しかし人間の頭と言うのは、必要なときに限って働かない。春樹はそんな自分の脳みそを深く呪った。

「……ごめん」

もう一度、謝る。それしかできなかった。

「ねえ、春樹」

声を僅かに震わせながら、晴は言う。

「ん？」

「ウチら、一緒に帰れるよね」

ウチ。それは晴の、昔の一人称。それが出ると言うことの意味を、春樹は知っている。だが、これは必ず果たせる約束ではない。帰れることを前提に話をしたとしよう。しかし春樹には、三人が笑って帰れる姿を、なぜか想像できなかった。思い浮かべても、自分の冷たい部分がそれを否定する。

だから彼は、答えを返す代わりに、晴の身を抱き寄せた。強く、きつく。応えるように、晴も首筋に手を回すように抱き締める。永遠にも近い沈黙が、二人を、温かく、包み込む。

二人は願っていた。このまま、時が止まればと。時間とは、離れて暮らすことになる恋人達の、最大にして最強の敵。どんな厳しい親よりも、交際を認めない親よりも、強く、無情で、抗えない。二人は、それを痛いほどよく理解していた。過去が、そうだったから。

第四話別れ、そして、旅立ち（後編）

コンコン、と扉をノックされる。春樹はベッドに寝そべってしていた思考を手放し、上体を起こす。

「どうぞ」

音もなく開けられたドアから現れたのは、淡い紫のメイド服――サラウイスだった。

「ああ、サラウイスさん」

「サラで構いませんよ」

「じゃあ、サラさんで」

フフフ、と笑いながら音もなくドアを後ろ手に閉める。

「おくつろぎのところ申し訳ありません。緊急のお話がありましたので」

「いや、気にしないでください」

言いながら、春樹は彼女の腹を探る。が、見えない。それは隠していることすら隠しているものとは別種の、純粹で素直な心という意味で。裏がないのだ。ないものを探すことほど、無理な話はない。

「今夜、なのでしょう？」

「聞いていたんですか？」

なにが、等聞かない。そもそも夜襲に備えた護衛と言う名目の監視役である騎士が部屋の外に立っている状態で、事情を知るもののみがわかる、最低限で誤解を生まない言葉で聞くのだ。少なくとも他意は、ない。それならば、話を進めるより他はない。

「私はただのメイドではありませんよ？」

「それは多分、彼らも気づいてます。で、用件は？」

「ええ、私が直々に、お世話をさせていただこうかと思ひまして」

そして近づきながら、口パクで抜け出す力添えを、と短く伝える。正確に読み取った彼は、どちらにも取れる返答を返す。

「ちようどどうしようか悩んでたんで、助かります」

「ええ。では、まずこれを」

言って、サラはベッドの縁に座り紙を取り出す。春樹も一人分の間を空け、その空間に紙を置かせた。

「なるほど」

それは、城の見取り図。ただし、一階と堀の内側のみ。ただ春樹も空を飛べるわけではない。ここからどう降りるかは別として、当然、城の土を踏みながら外に出る。そしてサラは、指先に小さな光をともす。爪の先程もない、とても小さな光だ。

「こうすれば、楽ですよ」

言いながら、地図にルートを書く。どうやら光は、紙を焦がして線を引くためのものらしい。スタートとなるのは、やはりここをまっすぐに降りたと想定したところだ。そこから裏門へ、堀づたいに進む。だが彼女は堀の行き止まりに差し掛かる少し前で進路を曲げた。堀を突き破るようにして。

（地下通路があります）

口パクで伝える。春樹が頷くと、彼女は嬉しそうに顔をほころばせる。

「有り難う御座います、助かりました」

「いえ。では、また後程」

立ち上がり、礼をする。一瞬の隙もないその華麗な動作は称賛に値する。そして彼女は、無音の内に部屋の外へ出ていった。

晴、そして軍侍。二人は、どうにも眠れずにいた。だからこそ、二人が廊下で、否春樹の部屋の前で出くわしたのは、偶然では片を付けられない。今日がたまたまなのか、いつもそうなのか、深夜になった今、彼らを監視するものがいなかったのもまた、巡り合わせだろう。

「やはり心配か？」

「……うん」

「案外、寝てたりしてな」

「それは、ないと思う」

「……だよな」

コンコン、と軍侍が扉を打ってみるが、反応がない。本当に眠っているかも、と二人は期待し、二度目、今度は少し強めにノックする。やはり、返事がない。一度寝ると最低六時間は起きない男だ。もしかしたら寝ているかもしれない。しかし、同時に嫌な予感も過る。

——もう、出発しているかもしれない——

それは二人の共通の発想。だからこそ、軍侍は急いでドアを開けた。途端、吹き荒れる突風。それは扉の対面にある窓が開いていて、風の逃げ道がなかったのを、急に作り出したからだろう。軍侍と晴は腕で顔を庇い、一瞬後に防御姿勢を解く。そこには、窓のわくからこちらを見つめ、しゃがみこむ——というよりうんざりに近い姿勢の——春樹を見た。

「春樹……」

「タイミングが悪いねえ」

軍侍と春樹のやり取りは、一瞬で終わる。話すことはなにもないとでも言わんばかりに、彼は窓枠で、平然と立ち上がったからだ。

「ねえ、春樹」

晴が彼を呼ぶ。一瞬、彼の表情が揺らぐが、すぐに張り付いたようなヘラヘラとした顔に戻る。

「晴……」

「行かないで！」「幸せになれよ」

晴が叫んだのと、春樹が言ったのは同時。

晴が追いかけたのと、春樹が体を後ろに倒しのも、同時。

窓枠にしがみつき、晴は下を見る。くると宙で回った彼は、壁を軽く蹴って勢いを殺しながら、着実に降りていく。遅れてやってきた軍侍がそれを見て、驚きと興味の色を見せた。

「なるほど、落下しながら体を壁を蹴って浮かすなど、普通はできん。これがやつと言っていたものか」

「今はそれどころじゃないでしょ!？　はやく春樹を!」

「無駄だ。あいつはもう走り出した。止められん。なら残された俺らはどうする?　一緒に、走ればいいだろう。そうしたらいずれ、今は違う道でも、また巡り合う。それが、俺とあいつの縁であり、九重とあいつの縁だ」

「……春樹。うん、私、追いかける。じゃなくて、一緒に走る。見えなくても、ずっと隣にいるから」

地を蹴ってとうとう進み出した春樹の、小さくなる背中を見つめて、晴は決意する。

影武者じゃ、影勇者じゃダメだ。私も、戦う。そうやって、魔王でも何でも倒しちゃって、また、春樹に会いたい……!

一人は、フライングすれすれのスタートダッシュをした。だがこれは勝負ではない。いずれまた再会^あうための、そして日常に戻るための、言わば三人の過酷なランニング。

魔王に勝つにはまず力。それがなければ犬死にするだけだ。彼らの課題は、一流以上の戦闘技術を、いかに短期間で作り上げるか。それであつた。

第五話 勇者修行

「いあああああ！」

甲高い声で木刀を振るった軍侍。目の前にいた騎士の木の盾が割れ、腕を強打する。一瞬の怯み、その一瞬こそが、戦場での命を左右する。それを証明するように、軍侍の木刀が騎士の首もとに突きつけられ、わずか一ミリの間合いで止まる。

「ひい！」

尻餅をつく騎士。彼は小隊長クラスで中々の腕はあるはずなのだが、軍侍の前では、見栄も、自負も、誇りも、完膚なきまで踏みにじられて倒される。木剣（刀ではない）は刀身の部分全てがなくなり、盾は粉碎し、一瞬で首に刀を突きつけられたのだ。完敗。しかもこの実力なら、初めから一本取られていたのだ。遊ばれた挙げ句、抵抗もできずに負けた。二人の実力の差を思い知らしめる試合だった。

「そこまで！」

会場がどよめく。軍侍の相手は、曲がりなりにも小隊長。しかも指折りの実力者だ。それがこうも呆気なくやられたのでは、彼らの動揺も頷けた。

「ふん、準備運動にもならないか」

一応、礼儀として左手に剣を納めて一礼する。しかし彼の言葉は、その行動には相反する。

「もっとだ。もっと上等なやつを用意しろ」

彼が苛立ちながら言うのも、致し方ない。春樹が城から抜けて一週間。軍侍は元々剣道をしていたこと、また実戦的剣術が身に付いていることから含めて、魔法の習得の片手間に剣の復習をしている。しかし打ち合いに出される兵は、どれも軍侍の役不足。とてもお話になりはしないから、彼がこうなるのも頷けた。対する晴は、本人の強い志願により戦う術を学ぶことにした。適正から言って魔法を

専攻したのだが、彼女にはかなりぴったりだったようで、普通なら灯火をつけるだけ、微風をふかせるだけで一ヶ月はかかると言うのに、今や彼女は中級魔法まで是一个のジャンルを除いてすべて扱える。

魔法のランクには、最下級、下級、中級、上級、最上級、最高等級の六階級がある。振り分けの基準としては、殺傷性の高さ、効果範囲、術の使用魔力だ。とりあえずこのことは、また後述することにした。

「流石はグンジ様。あのものも余裕で倒されるなんて、私ども、頼もしい限りです！」

「ああ、姫。かような場所にいてよろしいのか？」

軍侍に水とタオルを持ってきたのは、この国——メリフィア城塞王国の王女、アルマリア・スルト・メリフィアだ。

「やだ、グンジ様またその口調！ 堅いからやめてくださいと言ったじゃないですか」

「しかし……」

「そうねえ。命令よ、皆と接するように私と接しなさい」

「……わかった」

「それにしてもグンジ様、連日稽古と魔法の習得に勤しむのはいいけれど、たまには休まれては？」

「いや、そうも言っではられない」

「やはり、ハルキ様ですか？ 彼の判断の良し悪しは一概には決められません、こちらのことも学ばずに飛び出されたのでは、そんなに早く力は付けられないかと」

「それが、あいつの怖いところ。あいつは今ごろ、独学にしろ師を仰いだにしろ、剣も魔法も使えるレベルにはあるはずだ。一週間で、あいつはどんな状況にも対応しきる。まるで、初めからそこにいたように」

「適応能力が素晴らしいんですね」

「慣れが早いんだとよ」

「ぶええくしょっ！」

「集中せんか、馬鹿者！」

「いでっ」

どす、と分厚い本で叩かれ、金髪に琥珀色の目を持つ彼は、後ろに立つ師匠を恨めしげに見上げた。胡座をかいているからそうなるが、彼の師匠とて女性。立ち上がれば見下ろせた。彼女は赤髪に蒼い目、肌は健康的に小麦色に焼けている。年は二十代後半くらいに見える。背は百七十センチと女性にしては少し高い。引き締まった体軀は、彼女の第一印象をスレンダーと位置付ける。

「よいか、ハルキ。お前の体に宿る風を操作できん限り、ワシはお前に、魔法も、剣も教えんからな」

「な、ーもー、わーってら。俺だって、あいつらに遅れはとりたくねえからな」

「しゃべる暇があるなら集中！」

「理不尽！？ いでっ」

二度本で殴られる。しかし彼は掴みかけていた。内なる力、その根元たる他者にして自己の存在を。

「《氷柱千本》
つらちせんぽん」

唱えると同時に、三つの魔方陣が白いローブを着た晴の周りに展開する。一つは、大気中の気体、水蒸気を一気に固体、つまり氷へ昇華させる陣。また一つは、それを細い針に形成する陣。そして最後は、任意に魔力を流すことで効果を発揮し、今それは生み出した氷の針にベクトルを与えるもの。

そして、千の氷柱が最後の魔方陣に流された魔力により方向性を持ち、一体のダミー人形に全て命中する。

「《氷華》」

次に、ダミーに対して魔方陣二つが敷かれる。先に発動したのは、先の氷を溶かすもの。そして次に発動したのは、ダミーを浸す水を

凍らせるもの。しかし、ただ凍らせるだけではない。足元から、美しく儚い。氷の花が咲くのだ。全身を氷漬けにされたダミーへ、晴は一言、冷酷に呟く。

「散れ」

パアン、と涼しい音が響く。あとに残ったのは、溶けるのを待つ氷解だけであった。

術式発動の速さ、その行程、威力、美しさ。どれをとっても満点と呼べる演習に、同席したものは皆静かに拍手を送る。そんな中近づく、一人の老人。剥げた頭とは裏腹に白い髭は長く、シワだらけの顔、焦げ茶のローブを来ている。とこぞの誰かさんと同じく常に笑顔のため、（こころや）好好爺の印象が強い。

「晴ちゃんの才はやはり目を見張るのう。一週間でオリジナルを作り出すとは。異世界に魔法があるとは聞かんだが？」

「どちらかといえば、こういう物の変化についての学問があるんですよ。それは、物理学とか化学っていう学問なんですけど、その知識を応用してるだけですよ」

純粹な感動と称賛を込めた一言。晴はそれに丁寧答えた。

「なるほどのう。じゃがしかし、晴ちゃんや。君は保有魔力も、扱える系統も豊富じゃ。これは才と呼ばずしてなんと呼ぶかえ？」

「んーと、まあそこは置いときましようよ」

ふふ、と静かに笑う。

彼らは今、着実に力を蓄えつつあった。全ては、来る決戦のため。そして、また三人が笑顔で再開するため。

第六話 魔法とは

彼は今、戦っている。その相手は、風を纏いし虎。西方を護りし神。名は――

「白虎！」

「んだよ、っせーな。もうちょい寝かせえやハゲ！」

「は……俺のどこがハゲじゃ！ 見てみろ、この金髪！ 俺はまだピチピチの十、六、歳！ もうちょいで十七だけど、まだ十代だし！」

「あー、わかったわかった。んで？ 話って？」

「力を、貸してほしい」

「あーうん、ちょい待てや」

言って白虎は、この一面真っ白の空間のどこから紙を取りだし、爪先で何かを書いて彼――春樹に渡した。そこには、でかでかと「力」と書いてある。

「そーこれこれ、これが欲し――いわけあるかアホ！ 俺が欲しいのは白虎、お前のその強大な力だつて」

「んー、まあ合格なんじゃね？ ノリツツコミできるし」

「判定基準変じゃね！？」

「つー話はともかく、三日三晩ずっと、ハルキは自分の精神世界漂ってきたんだろう？ どうだった、自分の心ってえやつ」

そう、春樹は今まで、ずっと彼自信の心の中をさまざまに歩いていた。どれだけ歩いたかもわからないほどに。最初に降り立ったのは、陰湿で薄暗い森の中。そこを抜けると、今度氷の世界。歩き進めると氷が溶けて薄くなっていた川の、その氷の膜を破って流され、たどり着いたのは砂漠。そして最後にありついたオアシスの水を飲んだところで、この真っ白な世界に到着と言うわけだ。

「そうだな、一口には言い切れないけど、カオスだった」

「一口に言えるし！ とまあ、そうだろうな。お前は、光も知って

りや闇も知る。熱血も冷血も知っているし、乾きも潤いも知っている。まあある意味、一度にあれを体験して耐え抜いたってのは、ひとえにお前の精神力だろ。そもそも、あれを越えられないんじゃない俺を御することなどできないだろうさ」

「じゃあ、ここに着た時点で合格だったと？」

「ああ、そゆこったな」

「今の試験の意味ない!？」

「ああ、そゆこったな」

「なんかあつさり流された!」

「ああ、そゆこったな。やべえこれイントネーションいい!」

「ああ、そゆこったな」

一人と一匹は、互いの目を見合わせる。

「やべえキタコレ!」

ふっ、と意識の戻る感覚が、春樹を襲う。しかし次の瞬間、すぐに体の力が抜ける。が、何か柔らかいものに受け止められる。

「師匠……」

「ご苦労さん。精霊は、なんじゃった？」

「白虎でした」

「ほう、精霊の中でも最上位の神霊、あの白虎か。どうじゃ、かなりのくせ者じゃったろう？」

「ありゃあもう、くせ者って域じゃないっすね」

「それを手中にしたお前もな、ハルキ」

「そこいっちゃいますか？」

「ふっ。まあそれより、明日からは本格的に魔法の習得じゃ。気を引き締めておけよ」

「うい……っす」

かくっ、と力をなくして首を横に向ける春樹。三日三晩の荒行が災いしたか、すぐに眠ってしまったようだ。

「白虎も御する、か。あんた、とうとう夢が叶いそうだよ。あんた

からもらった玄武は、そのためだからね」

彼女は確信していた。そう遠くない未来、残りの四獣が現れると。そしてそれは、より大きな力を持ってして、この闇に侵食された世界を照らすと。

「さ、まずは魔法がどういうものかについてかの」

「お願いします」

胡座をかいて対面する二人。その部屋は昨日春樹が修行をしていた部屋だ。円形で、少し狭い。蝋燭台を六角形に置き、窓のないその部屋を六つの蝋燭が照らしていた。

「魔法とは、お前の分かりやすいように言えば、主に木火土金水の五行や火、水、土、風の四大属性、いわゆる精霊術のようなもの。それに光、闇を加えた合計八つの属性がある。ここまでの質問は？」

「一個。なんで師匠は俺たちの世界のことを知ってるんすか？」

確かに、これは不可解だった。多少時代の遅れは感じるものの、春樹のいた世界、つまり地球についての知識がある程度ある。しかし彼女は首を小さく横に振った。

「今気にするべきことではなからう。なに、時が来れば教えてやらんこともない」

「ういっす」

「では続けるぞ。まず木、火、土、金、水、風は、基礎魔術と呼ばれる。おおよそ自然に関係するものじゃから、扱いも自然の力を借りれば容易い。そして、光は浄化の役割を多く担うことから聖魔術、闇は暗黒的イメージを持つことから黒魔術と呼ぶのじゃ。まあ、黒魔術は必ずしも悪と言うわけではないがの。ちなみに、春樹にはこの中から、使える魔術の全てを習得してもらおう。使えるのなら、灯火程度でも火も使わせるし、大洪水を起こしたとしても水を使わせる。その覚悟で挑めよ^{のそ}」

「ういっす。異議なし」

「うむ、言い心がけじゃ。次に魔力に関してじゃ。これは魔法の発

動には必要不可欠なもので、この世の生けとし生けるもの全てに宿る。人もそうじゃが、動物はもちろん、植物、場合によっては石にも宿る。石に生命が宿るとは思えんが、まあ、それはこの際無視じゃ。そして魔法を使うにはこれの操作が必要で、より高位の魔法を使うにはこれをいかにうまく操るかが要点じゃ。

さらに、この魔力にはそれぞれ絶対値が存在し、それを越えられる者はそうはおらん。千年に一人、とも言われとる。まあ春樹の場合、最初から魔力がその体という器に収まりきらず溢れだしたるからう。心配はいらんからう」

「んー、それを抑える術も身に付けないとなあ」

「春樹の目的は、いかに敵の背後をとるか、じゃからな。まあある程度魔法を使えるようになったら、また教えてやらんこともない」

「ういっす。魔法って、大体そんな感じっすか？」

「じゃな。まあ春樹のことじゃ、今の理屈をある程度納得して聞けたなら習得はすぐじゃろ」

「俺のキーワードは納得、ですからね」

「よし、それでは早速始めるぞ」

「ういっす！」

気合いを入れて立ち上がる春樹と師匠。しかし彼らは後に後悔することになる。今ここで、すぐに魔力の気配を消す術を習得しなかったことに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2020x/>

勇者なんてお断りだ！

2011年11月5日08時10分発行